

公演日程

A program

第1592回 NHKホール
4/7[土] 開演 6:00pm
4/8[日] 開演 3:00pm

The 1592nd Subscription Concert
on 7th (Sat.) & 8th (Sun.) April
at 6:00 (Sat.) 3:00pm (Sun.) at the NHK Hall

指揮 マティアス・パーメルト
ヴァイオリン ドミートリ・シトコヴェツキ
コンサートマスター 堀 正文

Matthias Bamert, conductor
Dmitry Sitkovetsky, violin
Masafumi Hori, concertmaster

ハイドン／交響曲 第55番 変ホ長調 Hob.I-55
「校長先生」(22')

Franz Joseph Haydn (1732-1809)
Symphony No.55 E-flat major Hob.I-55
"Der Schulmeister"

- I アレグロ・ディ・モルト
- II アダージョ・マ・センブリチェメンテ
- III メヌエット
- IV フィナーレ：プレスト

- I Allegro di molto
- II Adagio ma semplicemente
- III Menuetto
- IV Finale: Presto

プロコフィエフ／ヴァイオリン協奏曲 第1番 二長調
作品19 (22')

Sergei Prokofiev (1891-1953)
Violin Concerto No.1 D major op.19

- I アンダンティーノ
- II ヴィヴァチッシモ
- III モデラート — アレグロ・モデラート

- I Andantino
- II Vivacissimo
- III Moderato - Allegro moderato

休憩

Intermission

ドヴォルザーク／交響曲 第8番 ト長調 作品88 (34')

Antonín Dvořák (1841-1904)
Symphony No.8 G major op.88

- I アレグロ・コン・ブリオ
- II アダージョ
- III アレグレット・グラチオーソ
- IV アレグロ・マ・ノン・トロッポ

- I Allegro con brio
- II Adagio
- III Allegretto grazioso
- IV Allegro ma non troppo

公演日程

C program

第1593回 NHKホール
4/13[金] 開演 7:00pm
4/14[土] 開演 3:00pm

The 1593rd Subscription Concert
on 13th (Fri.) & 14th (Sat.) April
at 7:00pm (Fri.) 3:00 pm (Sat.) at the NHK Hall

指揮 マティアス・バーメルト
ソプラノ アンナ・トモワ・シントウ
コンサートマスター 篠崎史紀

Matthias Bamert, conductor
Anna Tomowa-Sintow, soprano
Fuminori Shinozaki, concertmaster

ブラームス／悲劇的序曲 作品81 (13')

Johannes Brahms (1833-97)
Tragische Ouvertüre op.81

R.シュトラウス／4つの最後の歌 (24')

Richard Strauss (1864-1949)
Vier letzte Lieder

- I 春
- II 9月
- III 眠りにつくとき
- IV 夕映えのなかで

- I Frühling
- II September
- III Beim Schlafengehen
- IV Im Abendrot

————— 休憩 —————

————— Intermission —————

ブラームス (シェーンベルク編)／
ピアノ四重奏曲 第1番 ト短調 作品25 (43')

Johannes Brahms/Arnold Schönberg
(1874-1951)
Piano Quartet No.1 g minor op.25

- I アレグロ
- II 間奏曲:アレグロ・マ・ノン・トロppo
- III アンダンテ・コン・モート
- IV ロンド・アラ・ジנגアレゼ:プレスト

- I Allegro
- II Intermezzo: Allegro ma non troppo
- III Andante con moto
- IV Rondo alla zingarese: Presto



©Eric Richmond

指揮 conductor
マティアス・バーメルト
Matthias Bamert

マティアス・バーメルト (1942年生) はスイス出身の指揮者。ジョージ・セルやレオポルド・ストコフスキーのもとで研鑽を積んだ後、バーゼルのスイス放送管弦楽団の音楽監督 (1977~83年) を皮切りに、華々しいキャリアを始めた。スコティッシュ・ナショナル管弦楽団首席客演指揮者、グラスゴウの現代音楽祭「ムジカ・ノーヴァ」音楽監督、ルツェルン音楽祭音楽監督、ロンドン・モーツァルト・プレイヤーズ音楽監督、西オーストラリア交響楽団首席指揮者などを歴任。現在は、マレーシア・フィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者・アーティストック・アドヴァイザーを務めている。世界中のオーケストラからの客演要請も多く、これまでにフィルハーモニア管弦楽団、ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団、BBC交響楽団、バーミンガム市交響楽団、パリ管弦楽団、ザルツブルク・モーツァルテウム管弦楽団、ベルリン交響楽団、サンクトペテルブルク・フィルハーモニー管弦楽団、バルセロナ・オペラなどを指揮している。NHK交響楽団への客演は2000年の「Music Tomorrow」が最初。定期公演への客演は2003年6月、2005年11月に続いて、今回が3度目の登場となる。バーメルトは古典派から現代音楽まで、驚くほどに豊かなレパートリーを誇る。その一端はシャンドス・レーベルを中心とした録音活動、とりわけ古典派の珍しい交響曲を集成するシリーズ「モーツァルトの同時代者たち」や、ヒューバート・パリー、フランク・マルタン、コルンゴルト、ドホナーニといった近現代の管弦楽作品の録音に示されている。1987年からロンドン在住。

(安田和信)

ヴァイオリン violin

ドミートリ・シトコヴェツキ

Dmitry Sitkovetsky



かつて、ユリアン・シトコヴェツキというヴァイオリニストがいた。なにしろ当時の「鉄のカーテン」の彼方で、32歳の若さで逝った人なので、レコードも少数しか知られなかったが、モーツァルトもシベリウスも素晴らしいものだった。また、同じくソ連の人、ただし77年に息子の留学するアメリカに“脱出”したことで知られたピアニストに、ベラ・ダヴィドヴィチがいる。非常に美しいシヨパンを奏でる人である。

以上の2人が、ドミートリ・シトコヴェツキ（1954年9月27日、バクー生まれ）の父親・母親である。少年の頃はモスクワ中央音楽学校およびモスクワ音楽院でユーリ・ヤンケレヴィチに師事した彼だが、77年からはジュリアード音楽院でアイヴァン・ガラミアンに師事することになり、以降、生国には戻らなかった。79年ウィーンで催されたクライスラー・コンクールに優勝して名を挙げ、翌年ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団と共に弾いて以来、欧米を股にかけての盛んな

活躍が始まる。指揮者としても頭角を現し、90年にはニュー・ヨーロピアン室内弦楽オーケストラを組織している。各地で芸術祭の音楽監督をつとめたこともあり、一介のヴァイオリニストではない、むしろ万能の音楽家としての印象を世に広めた。その一環として、J.S.バハ《ゴルトベルク変奏曲》を弦楽トリオのために自ら編曲・演奏、かつ録音したものもかつて話題となった。この版はこんにち、若い世代から愛用されている。

このたびNHK交響楽団と奏するのはプロコフィエフだが、そのように懐の深い音楽家の、円熟の域に達した芸境を味わうのは大きな楽しみである。

(濱田滋郎)

ソプラノ soprano

アンナ・トモワ・シントウ

Anna Tomowa-Sintow



アンナ・トモワ・シントウといえば、バームやカラヤンやクライバーといった伝説の巨匠たちがお気に入りだった大プリマ・ドンナである。カラヤンの指揮ではR.シュトラウス《ばらの騎士》の優雅なヴェルデンベルク侯爵夫人を歌っているし、モーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》のドンナ・アンナも歌っている。またバームの指揮でドンナ・アンナを歌ったディスクが名盤として評判が高い。彼女の公演で最も印象に残っているのは、1981年に来日したスカラ座公演のヴェルディ《オテロ》である。この時彼女はデズデモナを歌った。オテロはプラシド・ドミンゴ、指揮はカルロス・クライバーだった！ いまとなっては伝説となったこの公演での、トモワ・シントウのよく透るクリスタルのような美声は、いまも耳に残っている。

トモワ・シントウは1941年ブルガリア生まれ。ブルガリアは美声の国として知られ、かつてはゲーナ・ディミトローフ、いまはヴェッセリーナ・カサロヴァがこの国の出身である。ブ

ルガリアでデビューしたあと、ベルリン国立歌劇場などで活躍。カラヤンに認められてからは、ウィーン国立歌劇場やザルツブルク音楽祭などで活躍した。得意分野はモーツァルトやR.シュトラウス、そしてワーグナーも歌っている。またプッチーニやヴェルディなどのイタリア・オペラの多くの役も歌っている。

73年にはウォルフガング・サヴァリッシュと共に来日し、NHKホールのこけら落とし公演の《第9》の舞台を飾った。以後、たびたび来日してオペラやコンサートに出演している。2001年には舞台デビュー35周年を祝ってヴェルディ《アイダ》に出演、2005年の夏にはNHK交響楽団と共演してオペラ・アリアを歌っている。今回は彼女が最も得意とするR.シュトラウスの《4つの最後の歌》を歌う。

(石戸谷結子)

[Cプロ]R.シュトラウス／4つの最後の歌

アンナ・トモワ・シントウ(ソプラノ)から エリーザベト・シュヴァルツコップフへの献辞

Elisabeth Schwarzkopf war eine der bedeutendsten künstlerisch-
gesanglichen Persönlichkeiten, vor deren Inspiration und Schaffen
ich mich tief verneige! Mit Dank für Ihre grosse Kunst und mit
tiefer Verehrung, widme ich diese Konzerte an ihr lichtvolles
Andenken!

Anna Tomowa-Sintow

エリーザベト・シュヴァルツコップフは、歌唱芸術の世界でもっとも傑出した
人物であり、私はその靈感と創造力に深い敬意を払ってまいりました。あなた
の偉大な芸術への感謝と深い尊敬をもって、この演奏会をその光明に
満ちた思い出に捧げます。

アンナ・トモワ・シントウ



エリーザベト・シュヴァルツコップフ (1915-2006)

ドイツのソプラノ歌手。プロイセン領(現ポーランド)のヤーロトシンに1915年に生まれる。
完成されたテクニックと知性にあふれた解釈でオペラ、歌曲の両分野で世界を代表する
名ソプラノとして長く活躍した。特に52年にカラヤンとミラノ・スカラ座で共演して大きな成
功をおさめたR.シュトラウス《ばらの騎士》のヴェルデンベルク侯爵夫人役は、以後、彼女
を代表する役柄となった。カラヤンは彼女とこのオペラを録音して以来、長い期間同曲の
録音からは遠ざかっていたが、新録音に際して同役を歌ったのがアンナ・トモワ・シントウ
だった。今回シントウが歌う《4つの最後の歌》も、シュヴァルツコップフが最も得意としたレ
パートリーの1つで、現在でもセルと共演したディスクでその有りし日の美声を聴くことがで
きる。2006年8月3日没。享年90歳。

ハイドン

交響曲 第55番 変ホ長調 Hob.I-55「校長先生」

なによりもまず、独特な曲名の由来が気になるところであろう。それが実のところ、あまりはっきりしておらず、たとえば、ハイドン(1732-1809)の代表的な研究家ウェブスターは、間違っつけられた名前、という、まったくの肩すかしの説すら挙げている。ハイドンの初期ディヴェルティメントに「校長先生」という名称の曲があり(現存しない)、その音楽がなんらかの劇作品と関連していた可能性はあるのだが、作曲家の没後、その名がいつの間にか《交響曲第55番》の愛称として用いられるようになった、というわけである。(諸説は『フィルハーモニー』の特集記事もご参照下さい)

いずれにせよ、この作品は、タイトルと音楽的内容とが特に結びついているわけではない。しかし、かなり変わった呼び名のおかげで、同時期のほかのハイドンの交響曲以上に親しまれ、演奏の機会にも恵まれているのは確かである。もちろん、それはこの曲にとって悪いことではない。ただ、たとえば同じ年に作曲された《第54番》《第56番》《第57番》といった、同様にすぐれた交響曲にも、この《校長先生》を入り口として、より多くの関心が向かうようになってほしいものである。このあたりの作品は、いまだ知られざる宝の山なのである。

ハイドンの交響曲のなかでは、1772年の

《交響曲第45番「告別」》が1つの大きな頂点を形づくっている。この傑作に代表される実験的で緊張度の強い作風は、その後、より平明な方向へと大きく変化した。2年後に書かれた《校長先生》では、第2、第4楽章が変奏曲となっている点に、その傾向をうかがうことができよう。一方、作曲家一流の形式上の工夫にも欠けることがなく、とくに第1楽章には、「ソナタ形式」の図式を当てはめようとする聴き手を大きく惑わせる、「擬似再現部」の見事な実例がある。

第1楽章 アレグロ・ディ・モルト 変ホ長調 3/4拍子。

第2楽章 アダージョ・マ・センプリチェメンテ 変ロ長調 2/4拍子。

第3楽章 メヌエツト 変ホ長調 3/4拍子。

第4楽章 フィナーレ：プレスト 変ホ長調 2/4拍子。

作曲年代：1774年

初演：不明

楽器編成：オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、
弦楽

(松田 聡)

プロコフィエフ

ヴァイオリン協奏曲 第1番 二長調 作品19

ロシア革命の年(1917年)、26歳のプロコフィエフ(1891-1953)はヴァイオリン協奏曲に初挑戦する。2年前、試みながらも中断したヴァイオリン小協奏曲を拡大。叙情性を基調に、ダイナミックな律動を加えて簡潔さをめざした。複雑な技法を求めていた間も、対極的な個性に強く魅かれていたようで、音楽理念(柔和な主題とグロテスクな風刺など)の対比がさわだっている。騒乱のペトログラード*やカマ川支流の山地などで書き進め、17年夏頃までにピアノ譜を終えた。なお創作中は名ヴァイオリン奏者パウル・コハニススキ(1887-1934)の助言を受けている。

全体は穏やかな第1・3楽章が嘲笑的なスケルツォをはさむ珍しい構成。華麗な裝飾音や弱音器の多用、転調の連続など、ヴァイオリンの可能性を模索するような難曲になっている。密な構造のなかで、ヴァイオリンが独奏とアンサンブルのリーダー双方の役割を果たすなど、当時としては独創的で新鮮なヴァイオリン協奏曲と言えるだろう。ほぼ並行して書いた《古典交響曲》とともに、プロコフィエフの芸術性を広げ成熟さを示す青年期の名作である。

作品は創作中からロシア音楽界に注目されたが、首都での初演(17年11月)は革命で中止となり、作曲者は故国を去る。初演予定者だったコハニススキは20年から米国で生活に追われ、西欧の名手たちは敬遠気味。やっと実現したパリでの初演(23年10月18日:ダリユー独奏)も——現代音楽ファンは斬新な音楽語法を期待したから一評価されない。24年夏シゲティの名演(プラハ初演)で、初めて認知をえることに

なる。ソ連では23年10月21日モスクワで18歳のミルシテインが挑戦(19歳のホロヴィッツがピアノ伴奏)。管弦楽伴奏版の初演は、24年10月8日レニングラード*で、シゲティによる。

この作品は、プロコフィエフの自信作だった。シゲティのモスクワ初演を聴いたミヤスコフスキーが管楽器ほかの用法に異を唱えると、パリにいた作曲者は指揮者などの準備不足と一蹴したのである。

第1楽章 アンダンティーノ 二長調 6/8拍子。ソナタ形式。再現部は第2主題などがなく、ひどく短い。

第2楽章 ヴィヴァチッシモ イ短調 4/4拍子。スケルツォ。5部分からなるロンド形式で、2つの中間部は冷笑的で不吉なイメージが交差する。

第3楽章 モデラート—アレグロ・モデラート 二長調 4/4拍子。3部形式。いくつかの主題が対位的に結ばれる。

作曲年代 : 1915~17年

初演 : 1923年10月18日。パリ。ダリユーのヴァイオリン、クーセヴィツキーの指揮

楽器編成 : フルート2(ピッコロ1)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、テューバ1、ティンパニ1、タンブリン1、小太鼓、ハープ1、弦楽、ヴァイオリン・ソロ

* はバテルブルクの当時の名称。

(伊藤恵子)

ブラームス

悲劇的序曲 作品81

長年の苦心の末、1876年に《交響曲第1番》を完成させたヨハネス・ブラームス(1833-97)は、その初演も成功を収め、交響曲作曲家としての名声を確固たるものとした。もはや悩む必要はなくなり、それから毎年のようにオーケストラ作品を発表するようになった。当時のブラームスは、冬は自作を中心とした演奏旅行、夏は保養地で創作活動、それ以外はウィーンで作曲の構想と仕上げというかたちで1年を過ごしていた。創作に専念できる環境と多くの友人に恵まれ、心に余裕のある充実した日々を送っていた。

1880年の夏は、ウィーンの上級階級が集まる高級保養地バート・イシュルに滞在した。前年にプレスラウ大学から名誉博士号の称号が贈られたブラームスは、その返礼として《大学祝典序曲》を書き、それと相前後して作曲が進められたのが、《悲劇的序曲》であった。《交響曲第2番》と《交響曲第3番》との間に書かれたこれら2つの序曲は対を成すもので、学生歌を用いた陽気な序曲とは性格が異なる。ブラームスの伝記を書いたカルベックは、ゲーテの『ファウスト』を題材とした劇音楽として構想されたのではないかと推測している。ブラームス自身は、「なんらかの悲劇を題材に想定したわけではない」と具体的ななにかと結び付けるこ

とは否定しているが、タイトルについては「〈劇的〉あるいは〈悲劇的〉あるいは〈葬送〉の序曲」と悩んでいたようである。

音楽(アレグロ・ノン・トロppo、ニ短調、2/2拍子)は、力強い2つの和音で開始される。弦楽合奏による第1主題が低音から立ち上がり、次第に勢いを強め、管楽器の対話を経て、穏やかな第2主題(ヘ長調)がヴァイオリンで奏される。展開部(モルト・ピウ・モデラート)では主に第1主題が扱われる。入念な主題労作を施した密度の高い作品である。

作曲年代：1880年

初演：1880年12月26日、ハンス・リヒター指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

楽器編成：フルート2、ピッコロ1、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ1、ティンパニ1、弦楽

(柴辻純子)

R.シュトラウス 4つの最後の歌

第2次世界大戦以降、物資不足のためにドイツの自宅を離れ、スイスのホテルを転々としていたリヒャルト・シュトラウス(1864-1949)は、息子フランツの勧めもあり1948年に久々に作曲の筆を執った。5月にまずアイヒェンドルフの詩による「夕映えのなかで」を、その後ヘッセの詩から、7月に「春」、8月に「眠りにつくとき」、9月に「9月」を作曲した。シュトラウスは嫁のアリーツェに「おまえさんの旦那が注文した歌曲だよ」といって、この総譜を渡したといわれる。

この曲集はシュトラウスの死後1950年5月にロンドンで、フラグスタートの独唱、フルトヴェングラーの指揮で初演された。その際の曲順は「眠りにつくとき」「9月」「春」「夕映えのなかで」だったが、初演後に出版された楽譜では「春」「9月」「眠りにつくとき」「夕映えのなかで」となっており、現在もこの順序で演奏されるのが一般的である。おそらく、オーケストラの編成が徐々に厚みを増すような曲順を採用したのであろう。

第1曲：春

Frühling

曲は暗い雰囲気の前奏に導かれて始まるが、詩の内容に沿って転調し、より明るい雰囲気になる。フルートが小鳥の声を

模してこれに應える。

第2曲：9月

September

「花に降る雨」はヴァイオリンの下降音型、「ひらひらと舞い落ちる木の葉」はフルートとヴァイオリンのスタッカートで表現される。「夏がゆっくりと疲れた目を閉じた」さまを奏でる後奏のホルン・ソロの旋律の美しさは比類がない。

第3曲：眠りにつくとき

Beim Schlafengehen

チェロとコントラバスによる前奏が印象的。この曲で初めて加わるトロンボーンが夜への憧れへと聴き手をいざなう。間奏ではヴァイオリンの甘美なソロがまどろみを歌い、ソプラノもその旋律を歌い継ぐ。

第4曲：夕映えのなかで

Im Abendrot

どこまでも広がるような夕映えを描写する前奏。初めて登場するティンパニの深みある音が、全曲中でも最も雄大な風景を描きだす。フルートで描かれた2羽のひばりが空を舞い、「もしかするとこれが死だろうか?」の部分では、交響詩《死と変容》のモチーフが鳴り響く。

作曲年代：1948年

初演：1950年5月22日。ロンドン。フラグスタートのソプラノ、フルトヴェンゲラー指揮フィルハーモニア管弦楽団

楽器編成：フルート4(ピッコロ2)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット2、バス・クラリネット1、ファゴット3(コントラファゴット1)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ1、ティンパニ1、ハープ1、チェレスタ1、弦楽、ソプラノ・ソロ

(広瀬大介)

R.シュトラウス 4つの最後の歌 歌詞対訳

R.Strauss Vier letzte Lieder

訳：広瀬大介

Translation: Daisuke Hirose

Frühling

In dämmrigen Grüften
träumte ich lang
von deinen Bäumen und blauen Lüften,
von deinem Duft und Vogelsang.

Nun liegst du erschlossen
in Gleiß und Zier,
von Licht übergossen
wie ein Wunder vor mir.

Du kennst mich wieder,
du lockst mich zart,
es zittert durch all meine Glieder
deine selige Gegenwart!

(Hermann Hesse)

春

ほの暗い 墓の中
長いこと 夢みていたのは
あなたの樹々と 青い空
あなたの香りと 鳥の歌

いま あなたは ヴェールをとり
まばゆい 装いを凝らし
溢れる 光の中から
奇蹟のごとく 現れた

いま再び あなたに会えた
その 甘美ないざないに
からだか 喜びにふるえる
あなたに会えて 無上の幸せ!

(ヘルマン・ヘッセ)

September

Der Garten trauert,
kühl sinkt in die Blumen der Regen.
Der Sommer schauert
still seinem Ende entgegen.

Golden tropft Blatt um Blatt
nieder vom hohen Akazienbaum.
Sommer lächelt erstaunt und matt
in den sterbenden Gartentraum.

Lange noch bei den Rosen
bleibt er stehen, sehnt sich nach Ruh.
Langsam tut er die
müdigwordnen Augen zu.

(Hermann Hesse)

9月

庭は 悲しみに沈む
冷たい雨は 花に降る
夏も ふるえているようだ
静かに 終わりの時を迎える

ひとひらの 黄金色の葉が
アカシアの樹から 舞い落ちる
夏はおどろき 力なく
死にゆく庭に 微笑みかける

いましばらく あのバラの傍らで
夏は 安らぎにあこがれる
そしてゆっくりと 力なく
夏は その目をとじる

(ヘルマン・ヘッセ)

Beim Schlafengehen

Nun der Tag mich müd gemacht,
soll mein sehnlisches Verlangen
freundlich die gestirnte Nacht
wie ein müdes Kind empfangen.

Hände, laßt von allem Tun,
Stirn, vergiß du alles Denken,
alle meine Sinne nun
wollen sich in Schlummer senken.

Und die Seele unbewacht,
will in freien Flügen schweben,
um im Zauberkreis der Nacht
tief und tausendfach zu leben.

(Hermann Hesse)

Im Abendrot

Wir sind durch Not und Freude
gegangen Hand in Hand;
vom Wandern ruhen wir
nun überm stillen Land.

Rings sich die Täler neigen,
es dunkelt schon die Luft,
zwei Lerchen nur noch steigen
nachträumend in den Duft.

Tritt her, und laß sie schwirren,
bald ist es Schlafenszeit,
daß wir uns nicht verirren
in dieser Einsamkeit.

O weiter, stiller Friedel!
So tief im Abendrot,
wie sind wir wandermüde -
ist dies etwa der Tod?

(Joseph von Eichendorff)

眠りにつくとき

昼に疲れ果て いまや
心から 望むのは
星降る夜に 抱かれること
遊び疲れた 子どもみたいに

手を動かすのは やめよ
頭を使うのも やめよ
さあ 五感の全てを
まどろみのなかへ 沈ませよ

そして魂は 見張るものなく
自由な翼を得て 羽ばたく
夜の 魅惑の世界で
深く 千代に生きるため

(ヘルマン・ヘッセ)

夕映えのなかで

苦難の時も 喜びの時も
手に手をとって 歩んだ2人は
いまここで さすらいをやめ
静かな風景を 見下ろしている

多くの谷に 囲まれて
夕闇が あたりを覆う
夕空には 2羽のひばりが
夜の夢を 追い求めて舞う

おいで 鳥は飛ぶに任せよう
もうすぐ 眠りの時間
道を見失わないように
ここには ただ2人きり

広やかな 静かな やすらぎ!
かくも 深き夕映え
さすらいにも 飽きてきた
これが 死というものか?

(ヨーゼフ・フォン・アイヒェンドルフ)

ブラームス(シェーンベルク編)

ピアノ四重奏曲 第1番 ト短調 作品25

ブラームスの初期の作品は、構想から完成までじっくり時間をかけて書き上げたものが少なくない。ピアノ四重奏曲は3曲あるが、最初の構想はいずれもほぼ同時期の1854~55年頃で、その後しばらく間があり、61年にト短調(《第1番》)とイ長調(《第2番》)が完成した。60年代に入ると、ブラームスの創作は、新しい段階に進んでいく。《交響曲第1番》は例外であるが、以前ほど改訂と変更を繰り返すことはなくなり、世に送り出した作品も演奏を重ねることに注目を集め、彼に対する評価も次第に高まっていた。

《ピアノ四重奏曲第1番》は、61年11月16日にハンブルクで初演され、その翌年の秋にはこの曲で、自身のピアノによってウィーンへのデビューを果たした。聴衆は暖かく彼を迎え、ウィーン音楽院院長でヴァイオリニストのヨーゼフ・ヘルメスベルガーは「これこそベートーヴェンの遺産だ」と褒めたたえた。これに気を良くしたブラームスは、閉塞感漂うハンブルクでの生活に区切りをつけ、ウィーンへの移住を決意したのだった。

それからおよそ80年近く経った1937年に、新ウィーン楽派の作曲家アルノルト・シェーンベルク(1874-1951)は、この曲をオーケストラ用に編曲した。ユダヤ人だったシェーンベルクは、33年にナチスが政権をと

ると、ヨーロッパを逃れてアメリカに亡命し、ニューヨーク、そしてロサンゼルスと移り住んだ。この編曲についてシェーンベルクは、地元の新記者に宛てた手紙のなかで次のように書いている。「1.この作品が好きだから。2.滅多に演奏されないから。3.たまたま演奏されても、ピアノの音が大きくて弦楽器の音がよく聴こえないから」

無調音楽で時代の扉を開き、12音技法の創始者であるシェーンベルクの音楽とブラームスの音楽は、相容れないように思われるかもしれない。しかしシェーンベルクは、『進歩主義者ブラームス』と題した講演のなかで、ブラームスの作曲技法を分析的に語り、新しい作曲家像を提示した。また別の論文では、ブラームスの音楽から学んだこととして「節約、しかも豊かであること」と書いている。この曲でも、冒頭小節の4音から成る動機が第2小節ではその反行形が用いられ、さらにこの動機が楽章の細部に至るまで徹底され、組織的に組み立てられている。シェーンベルクは楽譜に主要主題(Hauptstimme)を示すHの文字を細かく書き入れているが、ここでも主題がさまざまな楽器に割り振られ、豊かな音色で浮かびあがるように作られている。

第1楽章 アレグロ ト短調 4/4拍子。ク

ラリネットで始まる寂しげな第1主題が暗い色調のなかで広がり、力強い経過句に続いて、チェロによって第2主題(ニ短調)が奏される。この第2主題は変奏的に発展し、展開部では第1主題が主に取り扱われている。

第2楽章 間奏曲：アレグロ・マ・ノン・トロツポ ハ短調 9/8拍子。間奏曲とされているが、スケルツォ楽章に相当する。オーボエとイングリッシュ・ホルンによる悲哀に満ちた第1主題とヴァイオリンで始まる軽快な第2主題が交替していく。活発なトリオ(変イ長調)を経て、冒頭の音楽が再現され、最後はハ長調で静かに結ばれる。

第3楽章 アンダンテ・コン・モート 変ホ長調 3/4拍子。穏やかな主題が朗々と歌われる。中間部(ハ長調)は、歯切れの良いリズムが際立ち、大きく盛り上がる。

第4楽章 ロンド・アラ・ジンガレーゼ：プレスト ト短調 2/4拍子。19世紀に活動を大きく拡大したハンガリーのロマの楽団の音楽を思わせる。シェーンベルクも彼らの音楽と演奏を意識し、音色を工夫し演奏指示も書き入れている。華やかな熱狂の音楽にエピソードのようにはさまれる甘い旋律は、後のパトリス・ルコント監督の映画に効果的に用いられるなど、魅力的なフィナーレとなっている。

作曲年代：ブラームスによる作曲=1861年／
シェーンベルクによる編曲=1937
年5月～9月

初演：編曲の初演=1938年5月7日ロサン
ゼルス、オットー・クレンペラーの指
揮

楽器編成：フルート3(ピッコロ1)、オーボエ3
(イングリッシュ・ホルン1)、クラリネット
1、Esクラリネット1、バス・クラリネット
1、ファゴット2、コントラファゴット1、
ホルン4、トランペット3、トロンボーン
3、テューバ1、ティンパニ1、トライ
アングル、大太鼓、シンバル、グロッ
ケンシュピール、シロフォン、タンブ
リン、小太鼓、弦楽

(柴辻純子)

次回(5月)の定期公演 聴きどころ

近年ブルックナーに取り組む尾高で N響の《第8番》が聴ける!

山田治生

■ブルックナーの最高傑作を 尾高・N響で

今年還暦を迎える尾高忠明とNHK交響楽団との関係は長い。1968年にN響の指揮研究員となった尾高は、71年にN響の演奏会にデビュー。74年にはN響の定期公演に登場。その後、彼は、東京フィルハーモニー交響楽団、BBCウェールズ交響楽団、読売日本交響楽団、紀尾井シンフォニエッタ東京、札幌交響楽団のシェフを歴任するが、その間もN響との共演はずっと続けてきた。遡れば、氏の父、尾高尚忠(「尾高賞」にその名を残している)は、N響の前身である日本交響楽団の専任指揮者であった。尾高忠明の定期公演登場は、2004年2月のブラームスの《交



尾高忠明

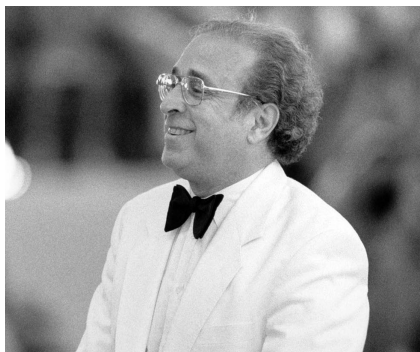
響曲第1番》《第3番》以来、3年ぶりとなる。

5月の定期Aプロでの曲目はブルックナーの《交響曲第8番》。近年、尾高はブルックナーの後期の交響曲に熱心に取り組んでいる。現在音楽監督を務めている札幌交響楽団とは定期演奏会で、2002年3月に《交響曲第9番》を、2005年2月に《交響曲第8番》を取り上げた(2008年2月にも《第9番》を指揮する予定)。私は、2003年7月に札幌のバシフィック・ミュージック・フェスティバルで尾高&札幌のブルックナーの《交響曲第9番》を聴いたが、尾高が札幌から重量感のある音を引き出し、単に整った演奏にするのではなく、ブルックナーらしい真実味のある音楽を作り上げていたことにとっても感心した。《交響曲第8番》はブルックナーの最高傑作といってもよい作品だけに、尾高がいっそう深まった演奏を聴かせてくれることを期待している。一方、N響はこれまでに、ロヴロフ・フォン・マタチッチ(75、84年)、朝比奈隆(97年)、スタニスラフ・スクロヴァチェフスキ(2006年)などのブルックナー指揮者とともに《交響曲第8番》の名演を繰り広げてきた。ブルックナーの《第8番》はN響にとっても特別な作品の1つといえるだろう。60歳を迎えようとしている尾高がN響とどんなに円熟した表現を聴かせてくれるのか非

常に楽しみだ。

■好サポートで知られるフォスターが 才人ブフビンダーと登場

アメリカ出身で、現在はポルトガルのゲルベンキアン管弦楽団の音楽監督を務める、名匠ローレンス・フォスターもN響との付き合いが長い。初共演は84年。定期公演への登場は95年以來となるが、97年、2001年にも共演している。フォスターといえば、協奏曲での好サポートで知られている。チョン・キョンファ、イツァーク・パールマン、ギル・シャハム、ニコライ・ズナイダーらのヴァイオリニストと協奏曲のディスクを残し、最近ではピアニストの小菅優とモーツァルトの《ピアノ協奏曲第9番》《第21番》を録音したばかり。今回は、ウィーン出身の才人、ルドルフ・ブフビンダーとブラームスの《ピアノ協奏曲第1番》を共演する。ブラームスのこの協奏曲は、交響曲にも匹敵する規模の大きな作品で、フォスターの腕の確かさが際立つことだろう。ブフビンダーは、2003年10月のN響の定期公演で準・メルクルの指揮のもと、R.シュトラウスの《ブルレスケ》の目覚しい演奏を披露したことが記憶に新しい。彼は、アーノン



フォスター

©Alex Irvin



ブフビンダー

クール&ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団とブラームスの2つのピアノ協奏曲の録音を残すなど、ブラームスの協奏曲を得意のレパートリーとしている。名匠のサポートを受けて、素晴らしい演奏を聴かせてくれそうだ。

■ルーマニア系のフォスターが ドヴォルザークに どうアプローチするか!

また後半にはルーマニア系の血をひくフォスターがドヴォルザークの《スラヴ舞曲第1集》(全8曲)を取り上げる。フォスターはこれまでもN響とドヴォルザークの《交響曲第8番》や《チェロ協奏曲》を共演するなど、ドヴォルザークの作品に愛情を注いできた。《スラヴ舞曲第1集》は、ブラームスに才能を見出されたドヴォルザークがブラームスの《ハンガリー舞曲集》を見習って作曲した民族色の濃い作品。コンサートのメイン・プログラムに演奏されることは珍しいかもしれないが、重厚なブラームスの大曲のあと、ドヴォルザークの珠玉の舞曲集をリラックスして楽しみたい。

(やまだ・はるお 音楽評論家)